

基調講演

高大接続の「セグメント化」と探究学習の意味

松下 佳代（京都大学 大学院 教育学研究科 教授）



ご紹介にあずかり、ありがとうございます。皆さん、おはようございます。私は京都大学教育学研究科の松下佳代と申します。2022年9月末までは京都大学の高等教育研究開発推進センターというところにおりまして、先ほどご紹介のあった溝上さんは元同僚でしたが、高等教育研究開発推進センターが廃止されて、今は教育学研究科で活動しております。今日は、先ほど長谷川先生から既にご紹介がりましたが、日本学術会議でセグメント化ということをおっしゃって、それが何を意味するのかということと、それから探究学習が高大接続を考える上でどのような意味があるのかをお話ししていきたいと思っております。自己紹介は、先ほど詳しくさせていただきましたので、飛ばそうと思っております。

（スライド3） 本日は、高大連携教育フォーラムの場ではありますが、高大接続に絞ってお話をさせていただこうと思っております。従来、高大接続の議論では2つの教育段階、つまり高校と大学が異質な教育機関であることを前提に、両者をいかにつなぐかが課題とされてきました。

2000年代の初め頃まではそうだったと思います。しかし現在では、大学の高校化、そして他方で高校の大学化が進んで、両者の異質性は依然として残ってはいるものの、各セグメント間の違いが拡大しているように見えます。セグメントの意味が分かりにくいと思いますが、後でご説明します。この状況において、探究学習がどのような意味を持つかを考えたいと思っております。本講演では幾つか事例を挙げながらセグメント化が進む高大接続の状況と、そこでの探究学習の意味について考えていきます。先ほど、このフォーラムは事例研究をやるというお話がありましたが、私もできるだけ具体的な事例を挙げながらお話ししていきたいと思っております。

（スライド4） 本日、私が使用する資料は、冊子になっているものと、今日、お配りしている「松下資料」というカラーの資料です。「参考」と書いてあるところが、今回、新たに資料として追加した部分です。少し具体的な話を入れた方がいいかと思ひまして、直前に入れさせていただいたので、この2つを組み合わせさせていただきます。

（スライド5、6） 高大接続を巡る状況ですが、高大接続と高大連携はどう違うのかをまず確認しておきたいと思ひます。よく似ている言葉ですが、高大連携はまさに高校と大学が連携して、高校教育および大学教育の改善や充実に資する取り組みのことです。一方、高大接続とは、高校と大学を区切ることとつなぐことで

す。接続は英語だとアーティキュレーションと言われますが、このアーティキュレーションには、辞書を引くと「関節」という意味もあります。関節は、切れているけれども、そこでつながりますよね。そういう意味があります。つまり区切ること、非連続性と、つなぐこと、連続性の両面を持ちつつ、学習者の移行、トランジションを促すことが高大接続です。人生には様々なトランジションがあるわけですが、その1つの大きなものが高校から大学への移行、トランジションとなります。先ほど長谷川先生がお示くださったとおり、日本学術会議の心理学・教育学委員会に置かれた高大接続を考える分科会が2023年にこの報告を出しました。これはPDFで公開されていますので、どなたでもお読みいただけます。当時、私はこの分科会の副委員長を務めておりまして、報告の作成にはかなり深く関わりました。

(スライド7) この内容を少しご紹介したいと思います。まず、なぜ高大接続が問題化してきたのかということです。これは、ここにおられる皆さんには改めてお話しするまでもないかと思いますが、大学がユニバーサル化してきて、学校システムの構造変化が生じたということです。小学校・中学校・高校・大学という形で1960年と2022年を比べますと、1960年段階ではピラミッド型になっていたのが、2022年段階には台形の形になりました。後のスライドでもお話ししますが、ピラミッド型のときには高校と大学は異質な教育機関であったと思います。ところが台形になってくると、大学の学校化、学生の生徒化という現象が生じてきました。

(スライド8) それをもたらした大学のユニバーサル化が何を意味するかということですが、これは日本だけではなく世界的にも現れている現象です。大学進学率によって大学教育の質が変わることは、1970年代半ばに、既にマーチン・トロウが予測していました。それが、その後、世界各国で実際に起こり、予測が現実とな

りました。1970年半ばにマス段階に到達していたのはアメリカだけでしたが、その後、他の国々も、マス化、ユニバーサル化していきました。エリート型のときは、高等教育は少数者の特権だったのが、50%を超えるとマジョリティになります。もちろん、高校を卒業して就職する人もいれば、専門学校に行く人もいます。高等教育というと日本では専門学校も含まれますが、ここでは大学がメインになっています。大学進学率が50%を超えると、大学に進学するのがデフォルトのような状況になってくるわけです。万人の義務というのは強い表現ですが、大学進学がデフォルトになると、様々な学生が大学に入ってきます。こうした中で、先ほど述べたように学校システムの構造がピラミッド型から台形型へと変わってきたということになります。

(スライド9) この変化を見越して、1990年代後半頃から高大接続に関する政策が次々に打ち出されてきました。そこでは教育改革も含めた接続が志向されていました。これは皆さんもご存じかと思いますが、2014年には高大接続答申が出されています。11月に学習指導要領の諮問が出され、12月に接続答申が出されました。このときの答申のタイトルは「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」でした。このように当初は三位一体で改革していくということでしたが、入学者選抜についてかなり大きな改革案が示されたこともあり、次第に入学者選抜の改革に焦点化されていきました。

2016年に高大接続システム改革会議の最終報告が出た後、2021年には大学入試のあり方について提言が出されました。結論としては、当初、案として出されていた、業者が行う英語のテストを入試にも活用したり記述型の問題を入れるといったことはかなりトーンダウンし、それぞれの大学が個別の入学者選抜の中で必要に応じて活用することになりました。

(スライド10) 高大接続改革の議論では、このように教育内容や方法を含めた三位一体の改革が入学者選抜に特化・焦点化されていったわけですが、今日のテーマである探究学習などが非常に重視されるようになる中で、教育接続について改めて考えるべき時期にきています。この教育接続は、大学入試センターにおられた荒井克弘先生が、2005年に提唱された言葉です。入学者選抜だけではなく、教育内容や方法、学力・能力等も含め、高校と大学を接続させようとする考え方として定義されています。これは、ユニバーサル段階での高大接続のあり方を示したものだ、とすることができます。

これは先ほどの図ですが、この図に示したように、1960年段階では高大接続は一部の人の問題で、10%にも満たない状況です。なおかつ入試のみで接続が図られていたわけですから、「点」の接続です。そこから、50%を超える人たちが大学に進学するようになって、高校と入学者選抜と大学を三位一体で接続を考えると、つまり「面」の接続が求められるようになったわけです。

(スライド11、12) 教育接続についての取り組みは、大きく2つに分けられます。1つは、高校から大学への移行期に焦点化した、大学生向けの教育プログラムです。今日、参加されている方は、高校関係者と大学関係者がほぼ半々くらいですが、大学生向けに行われているプログラムとしては、大学1年生に対する初年次教育、リメディアル教育、そして入学決定者に対する入学前教育があります。入学前教育は、まだ大学生になっていないが大学生になることが決まった人たちに対して、大学側が提供する教育です。

もう一つは、大学の学びの先取的性格を持つ、高校生向けの教育プログラムです。SSH(スーパーサイエンスハイスクール)やSGH(スーパーグローバルハイスクール)などがあります。IBDP(国際バカロレア・ディプロマ・プログラム)は、日本では高校2年生、3年生を対

象に行われていますが、内容的には大学の教養教育に近い高度な中身になっていると思います。そして、高校生向けの学問体験プログラムも様々な大学で行われています。京都大学では、「ELCAS」というものがあります。こういったプログラムを様々な大学が提供しています。



(スライド13) では、高大接続のセグメント化とはどういうことでしょうか。セグメント化とは、細分化して断片になっていくということです。高大接続の「セグメント化」は、先ほどの学術会議の報告の中で初めて使った言葉ですが、教育内容や選抜方法、学習者の社会的属性などによって、高校から大学への学習者の移行パターンが細かく分かれて、多様な高大接続が並存するようになった状況を指します。以前、共通一次試験が始まった際に、これまでよりも受験生が細かく分けられるようになった、1,000点刻みになったと言われましたが、あのときは入試だけです。ここで申し上げているのは、高校と入学者選抜と大学をつなぐような形でセグメント化が進んでいるということです。これは、さまざまな格差、例えば社会階層間の格差、地域間の格差、ジェンダー間の格差とも連動しています。それから、接続の際に円滑でスムーズな移行を求める傾向が強くなっています。つまり、引っかかったりすることなく高校と大学をつなげていくという発想です。これは、入学者選抜の前倒しや学生の囲い込みにもつながっています。

(スライド14) ユニバーサル化以前は、2つの異質な教育段階が存在して、両者をどのようにつなぐかが課題でした。ところが、ユニバーサル化が進み、なおかつ日本の場合には18歳人口が大きく減少するなかで、これまでは大学進学率の上昇、あるいは医療系の専門学校が大学になったり、短期大学が大学になったりで大学入学者数は徐々に増加してきたのですが、2026年以降はついに大学入学者数も減少に転じ、さらに2035年からは一気に減少していきます。そのような状況で、いかに自分の大学に高校生を呼び寄せるかがどの大学にとっても死活問題になっているわけです。これまでは、高校教育、入学者選抜、大学教育と縦に並んでいたのが、横にスライスされる感じでルートが断片化され、エリート大学を目指す進学校では高校の大学化が生じています。それから、あまり使いたくない言葉ですが、Fランクの大学では支援体制を充実させ、求めるレベルも下げて、大学の高校化が進んでいる状況になっています。

(スライド15) このような高大接続のセグメント化の中で、今、申し上げた2つのことが同時進行しています。大学の高校化では、学業水準が引き下げられ、学業面や生活面でのケアやサービスが非常に綿密に行われるようになってきています。高校の大学化では、探究活動が非常に高度化していった、幾つかの高校の探究を見ますと、大学の研究に近いようなものもあります。大学の先生や大学院生などの指導を受けながら探究活動を行い、ときには学会発表まで行っているような生徒もいます。現在は、このような大学の高校化と高校の大学化が同時進行している状況といえます。この背景として、一つには、今、申し上げた、18歳人口の減少による入学者獲得競争と、もう一つには高大接続改革があります。

これまで私学の附属高校は、入学者選抜をほとんど経ることなく、大学とつながっていたわけですね。今は私学だけではなくて、奈良

女子大学の例のように、国立大学でも附属の中等教育学校と大学をつないでいるところがあります。高校には高大接続コースがあり、そこでは大学教員と高校教員が協働でそのコースを作っておられます。前倒しのような高校の大学化があって、一緒にカリキュラム開発を行い、高大接続入試を受けて大学に入る仕組みになっているわけです。私学の高校には、〇〇大学コースといったものを設けているところもありますよね。そういうふうにして、大学と高校がつながるといことが、附属高校以外の高校にも広がってきています。

(スライド16) 先ほどの学術会議の報告と一緒に作った中村高康さんは、入学者選抜も「エリート選抜」と「マス選抜」に分かれていると述べられています。これも、会場の皆さんもよくよくご存じのことかと思えます。スライドでは国立と私立で分けていますが、選抜方法に違いがあります。「エリート選抜」と言われるものは、高等教育のエリート段階において支配的で、かつエリート層を念頭に置いた選抜方法だと中村さんは述べています。これは主に一般選抜、あるいはAO入試でも学力型のAO入試になります。京都大学の場合ですと特色入試です。それから、もう一つの「マス選抜」は、高等教育の大衆化を含む教育拡大の圧力によって生み出されました。必ずしもエリート層とは言えない学生を念頭に置いた選抜であると中村さんは述べています。マス選抜でも一般選抜はありますが、2科目あるいは3科目と科目数が非常に少ないです。そして、学校推薦型選抜や総合型選抜がかなり多くなっています。このように入学者選抜の方法も分化しているわけです。

(スライド17) これも皆さん、ご存じかと思いますが、高大接続において格差の拡大が見られます。教育社会学の研究では、母親の学歴によって社会階層を見ることがよく行われますが、母親の学歴が高いほど大学進学率が高くなります。また、経済格差でいうと、世帯収入が

多いほど大学進学率が高くなります。

(スライド18) これもよく目にするデータかと思いますが、ジェンダー間格差と地域間格差です。この格差は驚くほど大きく、東京都の女性の進学率と鹿児島県の女性の進学率を比べると、鹿児島県の女性の進学率はほぼ半分程度です。どこに、どのような性で生まれるかによって、与えられる機会がこれほどまでに異なるということが本当によく分かります。

(スライド19、20) 以上の点を踏まえ、今回のテーマである「モヤモヤ」を私なりにまとめてみますと、一つ目はセグメント化の現状にどう対処すべきかです。セグメント化は避けられない前提なのか、それとも克服すべき問題状況なのかということです。これは、本当に大きなテーマだと思います。先ほど、引用してくださったように、学会の報告の中でも、セグメント化の進行によって、高校教育、大学教育、それぞれのコアがなくなってきていて、社会的な格差が拡大してきているということを指摘しています。これを克服すべき問題状況としてとらえるのであれば、私たちに何ができるのだろうかということです。

もう一つの「モヤモヤ」は、現在の移行支援がこれでよいのかということです。先ほども述べましたように、現在の移行支援は円滑な移行や前倒し、囲い込みとなっています。移行において落ちこぼれたり、問題が生じたりしないようにできるだけ円滑にスムーズに移行させようとしています。ですが、私は、移行に伴う葛藤や不安は学生の成長にとって意味のあるものにもなるのではないかと考えています。小学校を卒業して中学校、中学校から高校、高校から大学という区切りがあって、その区切りが、もう一度、自分の人生を捉え直し、デザインし直す機会になっています。移行で知らないところに行くと、最初は、友だちができるだろうか、この環境でやっていけるだろうかと不安になりますが、それを乗り越えることによって一回り大きく成長して

いきます。そこを全部、円滑な移行という方向を目指すだけでいいのかということです。もちろん、移行がうまくいなくて、大学に通えなくなってしまう場合もあるのでサポートは必要ですが、目指す方向としてこれでいいのかという点を、「モヤモヤ2」としてお示ししておこうと思います。

(スライド21、22) さて、今日の講演は大きく二題話になっていまして、続いてもう一つの探究学習のお話に入りたいと思います。そもそも探究学習とは何なのか。京都大学の楠見(孝)先生は、「自ら問題を発見し、調査・観察・実験などによって事実を明らかにし、事実に基づいて論理的・批判的な思考・判断を行い、導いた結論を表現したり、問題を解決したりする学習活動」と定義しておられます。苫野一徳さんは、「自分たちなりの問いを立てて、自分たちなりの仕方で、自分たちなりの答えにたどり着く学び」であり、出来合いの問いと答えを決められた時間、決められた仕方でやる学びとは違う、とまとめておられます。一見するとこの2つはかなり異なるように見えますが、結構似ているとも思います。つまり、自分で問いを立てて、何らかの結論や答え、あるいは提案などに導いていく、やり方は様々あるが、そこは自分たちで選んでいくということです。

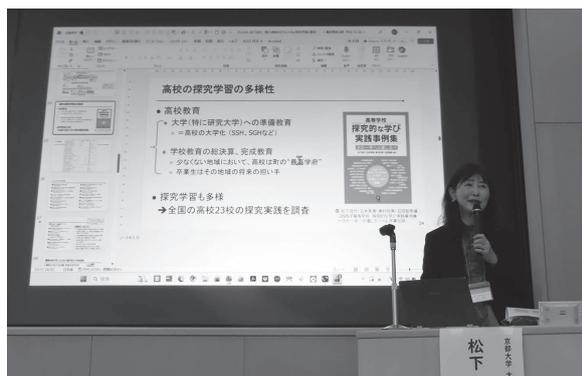
(スライド23) 今の学習指導要領では探究が、教科と総合の両方で入ってきていますよね。この図では、青いところが教科の探究、赤いところが総合的な探究を表しています。今回は総合的な探究の時間に焦点化してお話しします。

(スライド24) 今までいろいろな高校の探究学習を見てきましたが、探究学習は本当に多様です。それは高校教育に大きく2つの性格があることから来ています。一つは、大学、特に研究大学への準備教育という性格です。高校の大学化というのは、特にこのところで生じています。もう一つは、学校教育の総決算、完成教育という性格です。

今回、京都大学教育方法学研究室の院生やOBで、いろいろな高校を調査して、『高等学校 探究的な学び実践事例集』という本を刊行しました。その際、印象的だったのが「あの高校は、うちの町の最高学府なんです」という言葉でした。高校は町の誇りであり、この最高学府を出て、これから自分たちの地域を築いていってくれる人をいかに育てるかを地域ぐるみで行っている、そういう高校がたくさんあることを感じました。

(スライド25) このスライドでは私たちが調査した23の高校を挙げています。全部は読み上げませんが、北海道から九州まであります。近畿地区が一番多くなっていますが、私たちが何らかのつながりを持っていた高校にお願いをしましたので、このような分布になってしまいました。全国のさまざまな高校が、自分たちの学校での探究はどうあるべきかを模索しながら実践しておられることが本当によく分かりました。

(スライド26) 今回、各事例校の探究の特徴をみんなで議論しながら、それを表すキャッチフレーズのようなものを作りました。例えば、「教育で未来を創る町、鹿追町の挑戦」。鹿追町は北海道の十勝平野にあります。自分たちの町の最高学府である鹿追高校が学校存続の危機に陥ったときに、鹿追創生プロジェクトが立ち上がり、地域が一丸となって鹿追高校の探究学習に参画する仕組みが創られました。全ての事例を紹介することはできませんが、さまざまな高校が、自分たちの学校らしい探究を模索しながら実践しておられます。



(スライド27) 探究のスタイルをまとめてみますと、本格的な学問・科学研究を遂行する探究もあれば、地域と連携したり、地域の課題解決に参画したりする探究もあります。そのほか、地域に限らず社会問題の解決や究明に取り組む探究、企業との共同開発を行う探究、自身が関心を持つテーマをとことん調べていく探究、自分の生き方に向き合う探究、農業・水産・美術など専門高校・専門学科の強みを活かして行う探究、さらに特定の理論に根ざして展開する探究など、さまざまなスタイルがあることが見えてきました。私たちがこの本を編んだ一番の目的は、それぞれの高校が自分たちの目指す探究とは何か、次に自分たちはどうするかを考えるときの参考にしていただきたいということでした。

(スライド28) ただ、多様性の一方で、共通点も抽出できそうに思います。探究のスタイルの違いは何によって生まれているかという、3つの志向のどれに重点を置くかによって、この違いが生まれていると思います。3つの志向とは、学問(専門研究志向)、社会(社会参画志向)、そして自己(生き方探究志向)の3つです。この学問、社会、自己(学習者)というのは、カリキュラムの3つの源泉として古典的に言われてきたことなのですが、これが探究学習の場合も見られるというのは再発見でした。こうした3つの志向のどこに重きを置くかで探究学習のスタイルの違いが生まれてくるのですが、そうした違いはあれ、全ての志向がなんらかの形で有意義に編み込まれていることを感じました。例えば、先ほど挙げた鹿追高校や若狭高校、長崎県の松浦高校は、地域課題に参画しながら、自己の生き方と向き合って人間的成長を遂げることを目指しています。この場合は、社会と自己がメインですが、その中で学問的な知見や方法論なども使われています。

(スライド29) ここからは、探究実践のポイントだと思われることを6つ挙げたいと思います。1つ目は、総合と教科をどう関係づけるかで

す。教科の学びを総合探究の土台にする場合もあれば、総合探究での学びによって教科の授業や学びの様式が変容していく場合もあります。むしろ総合が教科を引っ張り上げるような形です。それから、教科と総合の共通部分に焦点を当てている場合もあります。

2つ目は、テーマと問いをどのように立ち上げるかです。これは、先生方にとっても生徒の皆さんにとっても、一番難しいと感じられるところではないかと思います。先ほど述べたように、学問的関心、社会的関心、個人的関心のどこに軸足、出発点があっても、ほかの2つも組み込んで進められます。逆にいうと、他の関心も取り入れながら、どこかにウエイトを置くような探究であってもいいと思います。そもそも、どのようにして探究、あるいは研究が生まれてくるのかというと、デューイは不確実で疑問を感じる状況や困惑・混乱から探究が始まると述べています。また、教育社会学の本田由紀さんは、怒りから生まれると言っておられます。ある生徒は、電車の中で、お母さんが自分のスマホを見て、子どもにもスマホを見せて、二人の間にはほとんど会話がないうという光景を見て、こんな育児でよいのかと感じたことから、スマホ育児について探究することにしました。つまり、問いの始まりにはこのような感情の動きがあるのです。

八王子東高校は、堀川高校から多くを学んで探究を進めておられる学校ですが、「プロットシート」と「質問シャワー」というものを使ってテーマと問いの立ち上げを行っておられます。

(スライド30) プロットシートの使い方ですが、まずマインドマップを作成し、自分がどのようなことに関心があるのかを探り、そこからテーマを立ち上げていきます。大体どんなところに関心があるか、テーマになりそうなところまで行った後でも、それだけでは探究の問い、すなわちRQ(リサーチクエスチョン)にはなりません。

そこで、質問シャワーを使って、探究にふさわし

いリサーチクエスチョンにしていきます。ある生徒は、まず「外来魚は環境にどのような影響を与えるのか」という問いを立てました。これは琵琶湖でもよく問題になりますね。この問いに対して、そもそも外来魚は何か、環境とは具体的に何を指すのか、対象とする地域や年代・時期はどこかといった質問を次々に浴びせていきます。これは生徒同士でも先生からでも可能ですが、こういった質問を浴びせることによって、よりリサーチクエスチョンらしく、ある一定の期間で結論に導けるような問いにしていくということが行われています。

(スライド31) 3つ目は、探究のノウハウをどのように教え、どのように学ぶかです。ノウハウと言うと少し軽い感じがしますが、探究の方法です。学校によってどのくらいの時間をかけるかは異なりますが、探究の型を学ぶのは大体どの学校でもある程度は入っています。これは後ほど、参考資料で示していきたいと思います。それから、ミニ探究です。例えば1学期や1年間といった大きく時間を使う探究を実施する前に、小さい探究を実施して探究の作法を経験的に学びます。さらに、先輩の探究から学んだり、取りあえず飛び込んで試行錯誤の中から学ばせることを実施されている学校もあります。これらをいくつか組み合わせる場合もあります。

4つ目は、探究実践において教師がどのような役割を果たすかです。まず、コーチやメンター、伴走者のような役割を果たすことがあります。また、先行研究者や先輩研究者の役割を果たす先生もいらっしゃいます。さらには、探究の環境整備をしたり、学校外の専門家、大学、あるいは実際にいろいろな問題に携わっておられる地域の方など、学校外とのつながりを作るハブ的存在の役割を果たす場合もあります。これら全てを果たす場合もあるかもしれません。

(スライド32) 5つ目は、探究的な学びの過

程と成果をどのように可視化して、評価をしていくかです。ここも悩んでおられるところが多いと思います。京都市立美術工芸高校では、キャリア・ポートフォリオという形で、ポートフォリオ評価を行っています。ポートフォリオ評価は、自分の学びの証拠資料をポートフォリオにエビデンスとして収め、全体を見通して学びの履歴をストーリー化する方法です。

こうしたポートフォリオを作った上で、学年末に四者面談が行われます。生徒は担任教師と美術工芸教科の先生、保護者に対して、自分の学びを発表していきます。生徒にとっては自分の学びを振り返る機会にもなっています。一般的には、ポスター発表の形式で探究発表会を行っている学校が多いかと思います。

(スライド33) こちらは、今、京都大学の教育方法学研究室で開発している「デジタル・ポートフォリオ」です。このデジタル・ポートフォリオは、Googleドライブなどに保存している資料をポートフォリオとして編集して、まるで本のように閲覧できるものです。京都大学では、教職課程などでこのデジタル・ポートフォリオを取り入れつつありますし、高校でも使ってくださっているところがあります。

(スライド34) このポートフォリオには、文字や画像のページだけでなく、URLがあるものであれば、動画も入れることができます。ページをクリックするだけでその動画が流れるようになっています。これは紙のポートフォリオにはない、デジタルならではのよさかと思います。



(スライド35) 最後に、6つ目のポイントとして、探究指導のカリキュラム・マネジメントをどのように行うかを見ていきたいと思います。これには、本当に様々な形があります。ここでは6つのパターンに分けていますが、これ以外にもあるかもしれません。まず、校長先生やミドルリーダーの教員がリーダーシップを発揮して行う場合があります。次に、教員組織で連携体制を作りながら進める場合があります。それから、学校に探究の文化が醸成されている場合もあります。例えば西条農業高校は、探究の文化が学校に浸透している感じがします。さらに、カリキュラム開発や改善の仕組みそのものを構築し、関係者で定期的なミーティングを実施するような形をとっているところもあります。それから、外部連携・協働型です。堀川高校では、大学院生のTA(ティーチングアシスタント)を効果的に使っておられますね。膳所高校も同様に、SSH(スーパーハイエンススクール)に指定されている高校は、そういうところが結構多いかと思います。最後に挙げたのは外部支援活用型です。これも多くの高校で行われていると思います。例えば、坂城高校では地域企業の協同組合が地域コーディネーター的な役割を果たしていますし、鹿追高校にはプロボノメンターという制度があります。プロボノというのは公共善という意味らしいです。鹿追高校では、公のために自分の持っている専門的なスキルや知識などを生かして貢献したいという人たちを募って、その人たちに探究に参加してもらい、生徒と一緒に伴走してもらっています。

以上、探究実践のポイントを6点にまとめてお話ししてきました。

(スライド36) さて、ここからは、本日追加した資料を使いながら、私自身の取り組みについて少しご紹介したいと思います。私は、探究を通して高大接続をする際に、「対話型論証」という取り組みをやっています。これは先ほどお話しした探究の型につながるものです。

(スライド37) 私はこれまで、小学校・中学校・高校・大学とさまざまな学校の授業や実践を見てきました。もちろん、学校段階、教科、分野によって違いはありますが、共通点もあると思いました。それが「対話型論証」です。この言葉は私の造語ですが、「ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠をもって主張を組み立て、結論を導く活動」のことです。こういうふうになると、自分の高校でも、あるいは大学でも同じような活動を行っていると思われる先生方が多いのではないのでしょうか。

(スライド38) この活動を進める上で、私たちは対話型論証モデルというものを作りました。まず、問題を設定します。教科であれば先生が問題を提示される場合が多いと思いますが、探究では生徒自身が問題を立てることが多いかと思います。その問題に対して、なんらかの結論を導きます。ひとまず結論が出てさらには探究が続くこともありますが、問題に対して何らかの答え、結論を見出そうとするところに探究があります。その結論は、様々な主張から成り立っているはずで、左側には、その主張を支える事実やデータがあり、それをどのように解釈して、どのような論拠で主張に結びつけるかという、理由づけを行います。もう一方、右側には、同じ問題に対して異なる意見を持っている人たちが大抵います。社会的な問題であればほぼ確実に対立があり、理系でも対立仮説のような形がありますよね。それに対して、なぜ対立意見ではなくて自分の主張が妥当だと言えるのかを示すために、対立意見に反駁を加えていく必要があります。こうして論証が行われるということを示したものが、このモデルです。

探究学習を通じて育てる力と関連づけると、論理的な思考、批判的な思考はこの三角ロジックの部分にありますし、意見の異なる人と対話をする中で、コミュニケーションの力が育ちます。また、自分の主張が本当に妥当かどうかを見直すことで批判的思考の育成にもなります。

そして、縦の軸は問題解決につながっていません。

(スライド39) これは、今のモデルの新しいバージョンです。現場で使ってみると、「丸では書き込みがしにくいから、四角にしてほしい」という声がありました。また、対立意見の側にも対立意見を言うだけの論拠や事実・データがあることを考えると、こちらにも同じような枠を作ったほうがいいのかということになりました。反駁については、どこに問題があるのかを示すために全体に反駁の矢印を向けています。対話型論証は、ディベートとは異なります。どこが違うかという、ディベートの場合は、相手を論破することを目指していますが、実際は対立意見から学ぶこともいろいろあります。相手からも学んで、統合的な結論・提言を作っていくことが重要です。

(スライド40) 高槻高校の例をお話しします(私が関わっていた3年前までのお話です)。高校1年ではキャリア探究として、個人で行います。対話型論証のやり方を学んでいくことも含まれています。高校2年では、グループでSDGs探究を行います。1年生のときはいろいろな文献やサイトなどを調べて自分の論を組み立てる感じでしたが、2年生ではなんらかの形で、自分でデータを集めて行います。それは、実験だったり、調査だったり、インタビューだったり、質問紙調査だったり、いろいろな方法があるわけですが、いずれにせよ自分たちでデータを集めて結論を導いていきます。

(スライド41、42) こちらは、対話型論証で探究を進めていくやり方を示した「探究チャート」です。時間が足りなくなってきましたので、ここは後でご確認いただければと思います。順番を入れてありますが、これはあくまでも参考です。実際には、行ったり来たり、あるいは同時並行的に行われたりすることがよくあります。

(スライド43、44) 最後、2月にポスター発表を行います。最初のころはA4の用紙を貼っ

ただけのポスターでしたが、最近はもう少し整ったものになってきています。今年2月の発表会で、この生徒たちは「下り階段で早足になるのはなぜか?」という問いについて探究していました。「そんなの当たり前じゃない?」と思いましたが、このグループの中の一人が以前からなぜだろうとすごく不思議に思っていたこともあり、このテーマになったのだそうです。いろいろなデータを取ったり、これは日本人だけの現象なのかということ海外のデータも取ったりして、一定の結論を導くところまで至っています。ポスターの中には対話型論証モデルが組み込まれていて、どういうロジックで論を組み立てたのかが示されています。対立仮説のようなものを挙げて、それがなぜ駄目なのかをここで反駁して、最終的な結論を導いています。

(スライド45) 高槻高校は進学校ですが、地域の中堅校と言ってもいいかと思いますが、盛岡北高校では地域課題の解決に対話型論証が使われています。三陸道にはトイレがなかったため、利用者は道の駅まで下りてトイレに行っていました。初めてトイレが設置されたという新聞記事を読んで生徒たちは「それって、どうなのだろうか」ということを考えました。地域活性化のためには、三陸道にトイレがなかったほうがかえって良かったのではないかとか、いろいろな意見が出ています。このようにして地域課題の解決などにも使われています。

(スライド46) 大学での研究とのつながりと言いますと、先ほど楠見先生の探究学習の定義でお示したように、高校の探究と大学の研究は、構造は似ていると思います。どんな問題に、どんな方法で取り組み、どんな結果になったのか、そして、その結果は何を意味していて、結論は何かという、IMRADという形式です(ちなみに、IMRADのAはアンドのAで、Dがディスカッションです)。一方、探究と研究の違いは、研究には新規性や学術的価値が必須であり、それが研究の価値を決めるという点にあります。

す。

(スライド47) 対話型論証モデルに入れますと、最初にイントロダクション、問題があって、方法があって、結果があって、考察をして、そして、そこから結論を導くという形になっています。

(スライド48、49) 時間が来ておりますが、最後に探究学習におけるモヤモヤを整理しておきたいと思います。今日、頂いた冊子を見ていて、私のは教員目線ではしか書いていない、高校生や大学生の目線では書いていないと反省しています。

「モヤモヤ」の1番目は、高校教員がどれだけの時間と労力を探究にかけられるのか、かけるべきなのかということです。総合的な探究の時間に労力をかけることで教科指導・学習がおろそかにならないか、探究学習の意義は分かっても、自分自身が探究学習の経験がなく、また研究の経験もそれほどない中でどうすればいいのか。外部からの連携・協働・支援を受けるにしても、今度はコーディネートに膨大な時間と労力がかかる、それをどうすればいいのかということです。

もう一つのモヤモヤは、大学教員は探究実践においてどのような役割が果たせるのかということです。大学教員は本格的な学問・科学研究を遂行するような探究の支援に関わるケースが多いと思いますが、それ以外にどのような関わり方があるのかです。今日、ここに来られている先生は、もっと違う関わり方をされているのではないかと思います。もう一つ、これは自分のモヤモヤですが、これをやっていると高大接続のセグメント化に拍車をかけることにならないのかというのがモヤモヤしているところです。また後で議論させてください。

(スライド50) 私の講演は以上です。ご清聴いただき、ありがとうございました。

スライド 1

2025年度 第23回 高大連携教育フォーラム
 探究的な学びが高大にもたらすもの—高大連携の「モヤモヤ」に迫る—

2025.12.6@キャンパスプラザ京都

高大接続の「セグメント化」と探究学習の意味

松下 佳代
 京都大学大学院教育学研究科
 matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

スライド 2

自己紹介

- **専門分野**
 - 教育方法学(能力、学習、評価が主テーマ)
 - 大学や中学校・高校をフィールドに研究と実践支援を行っています
- **実践・研究のフィールド**
 - 京都大学、新潟大学歯学部、藍野大学、岡山大学医学部、東京都市大学、京都芸術大学
 - 高槻中学校・高等学校、初芝富田林中学校高等学校、関西学院高等部、福島県立安積高等学校 など
- **社会的活動**
 - 日本カリキュラム学会代表理事、大学教育学会会長
 - 中央教育審議会大学分科会臨時委員
 - 日本学術会議連携会員 など



スライド 3

本日のトピック

従来、高大接続の議論では、2つの教育段階が異質であることを前提に、両者をいかにつなぐかが課題とされていた。

だが現在では、「高校の大学化」「大学の高校化」が進み、両者の異質性よりむしろ、各セグメント間の違いの方が拡大しているように見える。

この状況において、探究学習はどのような意味をもつのだろうか。

本講演では、いくつかの事例を挙げながら、セグメント化が進む高大接続の状況とそこでの探究学習の意味について論じたい。

スライド 4

OUTLINE

- 高大接続をめぐる状況
- 高大接続の「セグメント化」
- 高大接続における「モヤモヤ」
- 高校での探究学習の広がりや深まり
- 探究学習における「モヤモヤ」
- 【参考】探究でどう高大接続するか
—対話型論証を通して—

スライド 5

高大接続をめぐる状況

スライド 6

高大接続と高大連携

- **高大連携**
 - 高校と大学の連携による、高校教育及び大学教育の改善充実に資する取り組み
- **高大接続**
 - 高校と大学を区切ること(非連続性)とつなぐこと(連続性)の両面をもちつつ、学習者の移行(トランジション)を促すこと
 - *接続(articulation)・・・連続性と非連続性 cf. 関節



○ 櫻野裕彦(2004)『高大連携とは何か—高校教育から見た現状・課題・展望—』学事出版。
 ○ 日本学術会議 心理学・教育学会 高大接続を考える分科会(2023)『日本における高大接続の課題—「セグメント化」している現状を踏まえて—』
 (https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-h230926-6.pdf)

スライド 7

なぜ高大接続が問題化してきたのか

- 学校システムの構造変化:ピラミッド型から台形型へ
 - ← 大学のユニバーサル化

高校と大学は異質

高校の学校化 学生の生徒化

1960年

2022年

□ 荒井克弘(2005)「入試選抜から教育接続へ」荒井克弘・楳本昭彦編著『高校と大学の接続—入試選抜から教育接続へ—』玉川大学出版部, pp. 9-16. 7

スライド 8

- 大学のユニバーサル化
 - 日本は2000年代半ば頃から

	エリート型	マス型	ユニバーサル型
大学在学率	~15%	15~50%	50%~
高等教育機会	少数者の特権	相対的多数者の権利	万人の義務
高等教育機関の特色	同質性 (共通の高い基準)	多様性 (多様なレベル)	極度の多様性 (共通の水準の喪失)
主要な教育方法・手段	個人指導、ゼミナール制	多人数講義 + 補助的ゼミ	通信・TV・コンピュータ・教育機器等の活用 (トロウ, 1976)

□ トロウ, H. (1976)『高度階級の大学—エリートからマスへ—』(天野郁夫・喜多村和之編訳) 東京大学出版会. 8

スライド 9

高大接続に関する政策動向

- 1990年代後半～:教育内容・方法を含めた接続を志向
 - 1999 中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」
 - その後の答申も
- 2014年～: 三位一体改革から、次第に入学選抜の議論に焦点化
 - 2014 中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について」(=高大接続答申)
 - 2015 高大接続システム改革会議
 - 2016 「高大接続システム改革会議「最終報告」」
 - 2019:大学入試のあり方に関する検討会議
 - 2021 「大学入試のあり方に関する検討会議 提言」
 - …各大学が主体的に入学選抜を実施する

9

スライド 10

教育接続という課題

あらためて「教育接続」について考えるべき時期

- 教育接続とは
 - = (入学選抜だけでなく) 教育内容・方法や学力・能力等も含んで、高校と大学を接続させようとする考え方(荒井, 2005)
 - ユニバーサル段階での高大接続のあり方
- 「点」の接続(入学選抜)から、「面」の接続(教育接続)へ

1960年

2022年

10

スライド 11

高大接続の「セグメント化」

11

スライド 12

教育接続についての取組

- 教育接続についての取組
 - ①高校から大学への「移行期」に焦点化した、大学生向けの教育プログラム
 - 大学1年生に対する初年次教育
 - リメディアル教育(入学後の補習授業) ←大学に必要な科目・内容の未履修
 - 入学決定者に対する入学前教育など
 - ②大学の学びの先取的性格をもつ、高校生向けの教育プログラム
 - SSH(2002年度～)
 - SGH(2014～21年度)→SGHN(～26年度)
 - IBDP(国際バカロレア ディプロマ・プログラム)
 - 高校生向けの学問体験プログラム(例: 京都大学ELCAS)

12

スライド 13

「セグメント化」という現状

- 高大接続の「セグメント化」
=教育内容・選抜方法・学習者の社会的属性などによって高校から大学への学習者の移行パターンが細かく断片化し、多様な高大接続が並存するようになった状況

【特徴】

- さまざまな格差の拡大(社会階層間、地域間、ジェンダー間)とも連動
- 「円滑な移行」を求める
- 「前倒し」、「困り込み」の傾向

スライド 14

【ユニバーサル化以前】

高校 → 入学者選抜 → 大学

【ユニバーサル化+18歳人口減少以降】

高校の大学化 → 高校 → 入学者選抜 → 大学の高校化

- ・2つの異なる教育段階の存在
・両者をいかにつなぐかが課題
- ・<高校教育-入学者選抜-大学教育>というルートのセグメント化
・セグメント間の違いが拡大

スライド 15

大学の高校化(学校化)と高校の大学化

- 高大接続のセグメント化の中で
 - 大学の高校化と高校の大学化が同時進行
 - 大学の高校化: 学業水準の引き下げ + 学業面・生活面でのケア・サービス
 - 高校の大学化: 探究活動の高度化(SSH, SGH等)

【背景】

- 18歳人口の減少による入学者獲得競争
- 高大接続改革

【例】奈良女子大学附属中等教育学校「高大接続カリキュラム開発プログラム」

高校
・2・3年生対象「高大接続コース」
・大学教員と高校教員が協働でカリキュラム開発

「高大接続入試」

大学

スライド 16

入学者選抜の分化: エリート選抜とマス選抜

- 「エリート選抜」と「マス選抜」(中村, 2011)
 - ユニバーサル化が進むなかで、大学入学者選抜が2タイプに分化
 - エリート選抜
= 高等教育のエリート段階において支配的で、かつエリートを念頭に置いた選抜
* ユニバーサル段階でも残存
 - マス選抜
= 高等教育の大衆化を含む教育拡大の圧力によって生み出され、かつ必ずしもエリートとはいえない学生を念頭に置いた選抜

選抜性	選抜方法
エリート選抜 高	一般選抜(科目数多い)、学力型AO入試(総合型・学校推薦型選抜)
マス選抜 低	一般選抜(科目数少ない)、学校推薦型選抜、総合型選抜

2024年度

スライド 17

高大接続の社会階層間格差

- 高校卒業後の進路希望(母親学歴別)
- 高校卒業後の進路希望(世帯収入別)

○ 調査: 高橋(研究代表)(2021)「高校生の高等教育進学動向に関する調査研究 第一次報告書 令和2~4年度プロジェクト研究報告書」国立教育政策研究所

スライド 18

高大接続の地域間・ジェンダー間格差

男女別・都道府県別の4年制大学進学率

大学進学率を男女別により、都道府県別(40都道府県)で男性の方が女性より高く、男女の進学率の差は①山梨県(15.6ポイント)、②滋賀県(10.8ポイント)、③北海道(9.8ポイント)の順に高い。

性別: 男性性, 女性性

①山梨県 ②滋賀県 ③北海道

スライド 19



高大接続における「モヤモヤ」

スライド 20

- **モヤモヤ1: セグメント化の現状にどう対処すべきか?**
 - セグメント化は、「避けられない前提」か、「克服すべき問題状況」か?
 - セグメント化の進行 → 高校教育と大学教育のコアの喪失
社会的格差の拡大
 - 「克服すべき問題状況」だとすれば、何ができるか?
- **モヤモヤ2: 移行支援はこれでよいのか?**
 - 現在の移行支援: 「円滑な移行」、「前倒し」「囲い込み」
 - 移行に伴う葛藤・不安は、学生の成長にとって意味のあるものではないか? (ただし、サポートは必要)

20

スライド 21



高校での探究学習の広がりや深まり

スライド 22

探究学習とは?

- ① 自ら問題を発見し、
- ② 調査・観察・実験などによって事実を明らかにし、
- ③ 事実に基づいて論理的・批判的な思考・判断を行い、
- ④ 導いた結論を表現したり、問題を解決したりする学習活動

□ 梶見孝(2017)『探究力と創造性の獲得』橋本伸介(編著)『探究! 教育心理学の世界』新曜社。

- 自分(たち)なりの問いを立て、
- 自分(たち)なりの仕方、
- 自分(たち)なりの答えにたどり着く学び

(× 出来合いの問いと答えを決められた時間に、決められた仕方学ぶ学び)

□ 吉野一彦(2019)『「学校」をつくり直す』河出新書

22

スライド 23

「探究」の氾濫: 教科と総合

高等学校の教科・科目構成について
(文科系・理系系・芸術系・体育系)

<p>言語系</p> <p>国語、英語、外国語、第二外国語、日本語教育、外国語教育、英語教育</p>	<p>公認系</p> <p>保健体育、音楽、美術、情報</p>
<p>数学科</p> <p>数学A、数学B、数学C、数学I、数学II</p>	<p>理系</p> <p>物理、化学、生物、地学</p>
<p>芸術系</p> <p>音楽、美術、書道、工芸、演劇、ダンス、メディア芸術</p>	<p>外国語系</p> <p>外国語、第二外国語、日本語教育、外国語教育</p>
<p>家庭科</p> <p>家庭科</p>	<p>総合的な探究の時間</p> <p>総合的な探究の時間</p>

今回は、主に総合に焦点化

23

スライド 24

高校の探究学習の多様性

- 高校教育
 - 大学(特に研究大学)への準備教育
 - =高校の大学化 (SSH、SGHなど)
 - 学校教育の総決算、完成教育
 - 少なくとも地域において、高校は町の“最高学府”
 - 卒業生はその地域の将来の担い手
- 探究学習も多様
 - 全国の高校23校の探究実践を調査



□ 松下佳代・石井英真・奥村好美・石田智敬編
(2025)『高等学校 探究的な学び実践事例集 一次の一手への道へ』学事出版。

24

スライド 25

● 事例校	学校名	地方	国公私	学科
	北海道公立高等学校	北海道	普通	
	宮城県仙台国際洋高等学校	東北	専門	
	宮城県仙台第三高等学校	東北	普通・専門	
	東京独立八王子東高等学校	関東	普通	
	福井県立石浜高等学校		普通・専門	
	山梨県立新牧高等学校	中部	普通・専門・総合	
	長野県飯城高等学校		普通	
	滋賀県立彦根高等学校		普通	
	京都府立藤川高等学校		普通・専門	
	京都府立豊岡工業高等学校		専門	
	立命館宇治中学校・高等学校		私立 普通	
	京都産業大学附属中学校・高等学校		私立 普通	
	大阪府立三国丘高等学校	近畿	公立 専門	
	高槻中学校・高槻高等学校		公立 普通	
	香取マウェール学院中学校・高等学校		私立 普通	
	兵庫県立箕田高等学校		公立 専門	
	兵庫県立養父高等学校		公立 専門	
	神戸大学附属中等教育学校		国立 学科の区別なし	
	岡山県立岡山南高等学校		公立 専門	
	広島県立広島中学校・広島高等学校	中国・四国	公立 普通	
	広島県立広島南高等学校		公立 普通	
	広島県立西条養老高等学校		公立 専門	
	長崎県立和道高等学校	九州	公立 普通・専門	

スライド 26

● それぞれの特徴

- ① 教育で未来を創る高、進捗の挑戦
【北海道公立高等学校】
- ② 地域産業を地盤とし、海と生きる専門学科の課題解決学習
【宮城県仙台国際洋高等学校】
- ③ 学校外の世界に乗り出す探究がカリキュラムを駆動する
【東京独立八王子東高等学校】
- ④ リベラルアーツ文化の薫る公立校の新たな挑戦
【京都府立豊岡工業高等学校】
- ⑤ 生徒の主体性を育む探究カリキュラムと教員の協働的関わり
【福井県立石浜高等学校】
- ⑥ 生徒と教員が探究できる学校を目指して
【山梨県立新牧高等学校】
- ⑦ 地域社会と生徒たちを結びつける「飯城学」
【長野県飯城高等学校】
- ⑧ 当事者としての深化と閉鎖を目指す探究
【滋賀県立彦根高等学校】
- ⑨ 充溢探究力のさらなる高みを目指すカリキュラム再編
【京都府立藤川高等学校】
- ⑩ 美術を選んだ領域横断的な探究のあり方
【京都府立豊岡工業高等学校】
- ⑪ 自己の生き方・在り方と向き合う探究学習
【立命館宇治中学校・高等学校】
- ⑫ 「情報」との連携・独自の評価システムによる探究
【京都産業大学附属中学校・高等学校】
- ⑬ 豊かな探究力と豊かな倫理力の育成を目指す探究学習
【大阪府立三国丘高等学校】
- ⑭ GLコースでの対話型論議を軸としたカリキュラムの構築
【高槻中学校・高槻高等学校】
- ⑮ 社会で活躍できる人材を目指すPBL
【香取マウェール学院中学校・高等学校】
- ⑯ 分野・言葉の壁を越え、世界を視野に入れた探究活動
【兵庫県立箕田高等学校】

スライド 27

各学校が、それぞれのニーズやリソースを踏まえて創意工夫をこらしながら、一口から探究のカリキュラムを創造

● 探究のスタイル

- 本格的な学問・科学研究を遂行する探究
- 地域と連携したり、地域の課題解決に参画したりする探究
- 社会問題の解決や究明に取り組む探究
- 企業との共同開発を行う探究
- 自身が関心を持つテーマをほとんど調べしていく探究
- 自分の生き方に向き合う探究
- 専門学科の強みを活かして行う探究
- 特定の理論に根ざして展開する探究 など

- ① 専門性を生かした地域課題解決のための「総合学習」と「課題研究」
【兵庫県立養老高等学校】
- ② 異学年協働で深める探究学習「Kobeプロジェクト」
【神戸大学附属中等教育学校】
- ③ 探究的学びのスタイルを育成するカリキュラム
【岡山県立岡山南高等学校】
- ④ 6年間を貫いた探究学習「たけなほ」から「課題研究」へ
【広島県立広島中学校・広島高等学校】
- ⑤ 生徒の主体性を尊重した「課題解決型」と「ナゾ解明型」
【広島県立広島南高等学校】
- ⑥ 専門科目と普通科目の連携・融合・往還を基盤とした探究カリキュラム
【広島県立西条養老高等学校】
- ⑦ 地域と共に学ぶ「まふた」探究学習モデル
【長崎県立和道高等学校】

スライド 28

探究のカリキュラムにおける3つの志向

● 探究のスタイルの違いを生み出すもの

↓

● 3つの志向のどれに重点を置か

- 学問(専門研究志向)
- 社会(社会参画志向)
- 自己(生き方探究志向)

…どこかの志向に軸足がありつつも、すべての志向が有意義に組み込まれている

【例】鹿追高校、若狭高校、松浦高校
● 地域課題に参画しながら、自己の生き方と向き合い人間的成長を遂げることをめざす

□ 資料対表・石田智哉(2025)「深まりのある探究へと生徒をどう導くか」松下他編『高等学校 探究の学び実践事例集一次の一手へ通じるへ』学事出版

スライド 29

探究実践のポイント

● ① 総合と教科の関係は？

- 教科→総合：教科の学びを総合探究の土台にする(例：八王子東、専門高校)
- *教科で深い学びにつながる良い問いを体験することで、総合での自分の問いの立て方を学ぶ
- 総合→教科：総合探究での学びが教科の授業や学びの様式が変容(例：仙台三高)
- 教科と総合の共通部分：情報(例：京産大附属中高)、対話型論議(例：高槻中高)

● ② テーマと問いをどのように立ち上げるか？

- 学問的関心、社会的関心、個人的関心のどこに軸足、出発点があっても、他の2つも組み込んでいく
 - 不確実で疑問を感じる状況、困惑や混乱から探究は始まる(デュイ)、怒りから(本田由紀)
 - 例：電車の中で見た「スマホ育児」
 - 「プロットシート」と「質問シヤワー」(例：八王子東)

スライド 30

プロットシート

質問シヤワー

● 「外来魚は環境にどのような影響を与えるのか」

- 「外来魚とは何か」
- 「環境とは、具体的に何を指すのか」
- 「対象とする地域や年代・時期はどこか」
- 「浅川の中流域におけるスモールマウスバスの用水路への移動は在来種であるタナゴの繁殖にどのような影響を与えているのか」

図2. プロットシートと生徒の記入例(『探究ハンドブック』より) (松下他編, 2025, pp. 63-64: 岡村亮祐執筆)

スライド 31

③ 探究のノウハウをどのように教え、どのように学ぶか？

- 1. 探究の型を学ぶ(例:高槻中高「対話型論証」) →【参考】
- 2. ミニ探究を試行して、探究の作法を経験的に学ぶ
- 3. 先輩から学ぶ(例:神戸大附属中高)
- 4. とりあえず飛び込んでみる

④ 探究実践において教師はどのような役割を果たすか？

- コーチ、メンター、伴走者の役割
- 先行・先輩探究者の役割
- 探究の環境整備者、学校外とのつながりを作るハブ的存在の役割

31

スライド 32

⑤ 探究的な学びの過程と成果をどのように可視化するか？

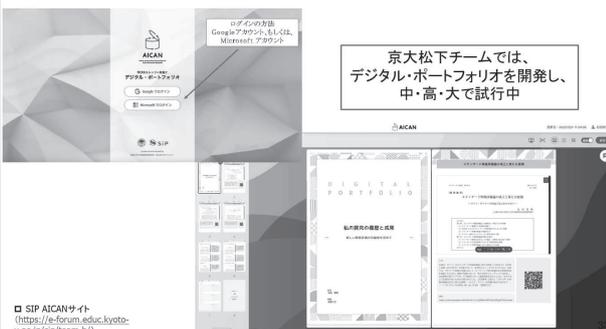
- ポートフォリオ評価…学びの履歴(ストーリー)と成果(エビデンス)を可視化できる
- 「キャリア・ポートフォリオ」(例:京都市立美術工芸高)
 - 四者面談(生徒、担任教師1名、美術工芸教科教員1名、保護者):その学期の学びを振り返る機会



図3. カスタマイズされた表紙例 図4. 記録の方法 写真3. 四者面談の様子

(松下他編, 2025, p. 114: 小柳至幸執筆) 32

スライド 33



京大松下チームでは、デジタル・ポートフォリオを開発し、中・高・大で試行中

ログインの方法
Googleアカウント、もしくは、Microsoft アカウント

SP AICANサイト
(<https://se-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/sp/team-b/>)

スライド 34



AICAN

石川県立のデジタル・ポートフォリオ

DIGITAL PORTFOLIO

私の探究の経歴と成果

34

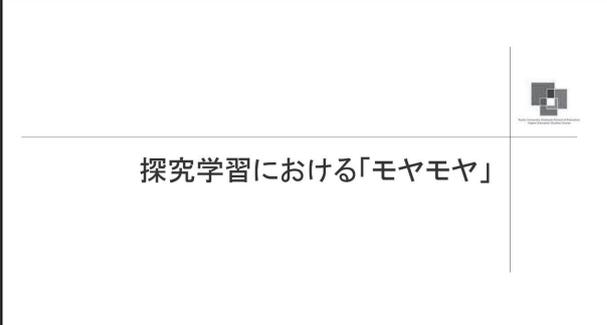
スライド 35

⑥ 探究指導のカリキュラム・マネジメントをどう行うか？

- リーダーシップ発揮型**
 - リーダー: 校長(例: 富吹高)、ミドルリーダーの教師(例: 立命館宇治)
- 教員組織連携体制構築型**
 - 推進チームを構築(多数) / 全教員が関わる仕掛け(例: 仙台三高) / 特定の教員間で連携(例: 高槻中高)、普通教科と専門教科の連携(例: 京都市立美術工芸高)
- 文化醸成型**
 - 学校の伝統的文化、取組の中で醸成(例: 西条農業高)
- カリキュラム開発・改善の仕組み創出型**
 - 関係者での定期的なミーティング(例: 松清高)
- 外部連携・協働型**
 - 大学院生のTAによる探究支援(例: 堀川高)
- 外部支援活用型**
 - 地域企業の協同組合が地域コーディネーター的役割(例: 坂城高)
 - 「プロボメンター」としての企業・専門家・町民の伴走(例: 鹿追高)

35

スライド 36



探究学習における「モヤモヤ」

スライド 37

- **モヤモヤ1: 高校教員はどれだけの時間と労力を探究にかけるべきか・かけられるのか?**
 - 総合探究に時間と労力をかけることで、教科指導・学習がおろそかにならないか?
 - 探究学習の意義がわかって、自分自身が探究学習の経験がなく、研究の経験もおぼつかない中で、どうすればよいのか?
 - 外部からの連携・協働・支援を受けるにしても、今度はそのコーディネートに膨大な時間と労力がかかるのをどうするか?
- **モヤモヤ2: 大学教員は探究実践においてどんな役割を果たせるのか?**
 - 「本格的な学問・科学研究を遂行する探究」の支援に教員・院生が関わるケースが多いが、それ以外にどんな関わり方があるのか?
 - 高大接続のセグメント化に拍車をかけることにならないか?

スライド 38

【参考】探究でどう高大接続するか
—対話型論証を通して—

スライド 39

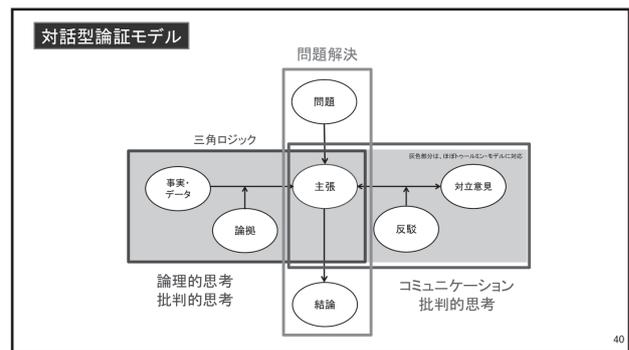
学校でぜひ身につけてほしいこと

- 予測困難な時代
「学校で身につけてほしいこと」を一つに絞るとすれば…
←小学校から大学までさまざまな授業や生徒・学生をみてきた経験から

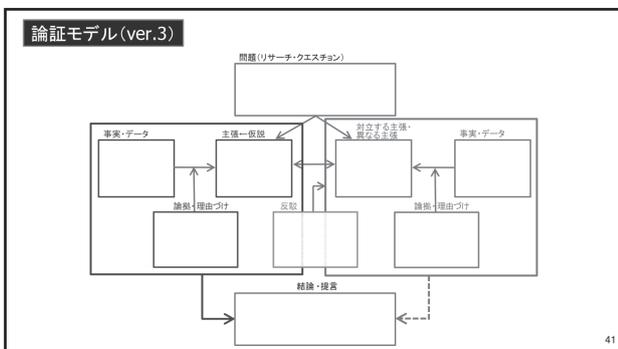
↓

「対話型論証」
＝「ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠をもって主張を組み立て、結論を導く活動」

スライド 40



スライド 41

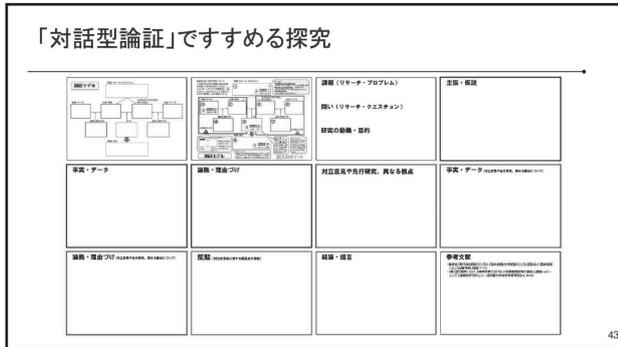


スライド 42

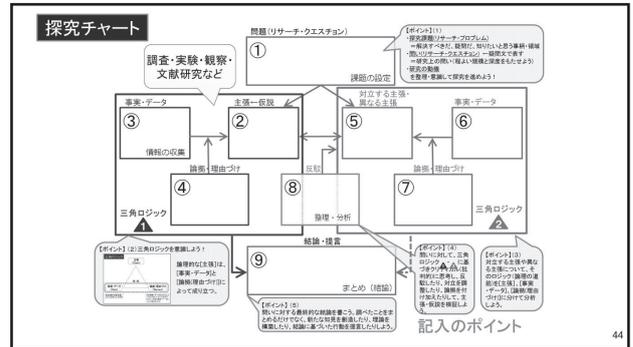
高槻高校 (GLコース) での取組

- **高校1年: キャリア探究**
 - 4月～9月: 教師が生徒に様々な問題を与え、生徒はその問題に対して結論を導く
 - 文理選択は必要か? / iPhoneロック解除をめぐる是非 など
 - 10月～2月: 自分や社会の未来に関連する事柄について論証モデル (ver.3) を使いながら、個人で文献探究
 - 2月: 探究の成果についてポスター発表
 - 3月: 探究レポートの提出
- **高校2年(文系のみ): SDGs探究**
 - 4月～7月: 教師が生徒にSDGsに関連する問題を与え、生徒がその問題に対して結論を導く
 - インタビューとアンケートの手法について学ぶ
 - ミスコン開催をめぐる新たな改革 / 大学入試における公平性 など
 - 8月～2月: SDGsに関連する事柄について論証モデル (ver.4) を使いながら、グループで調査探究
 - 2月: 探究の成果についてポスター発表
 - 3月: 探究レポートの提出

スライド 43



スライド 44



スライド 45



スライド 46



スライド 47



スライド 48

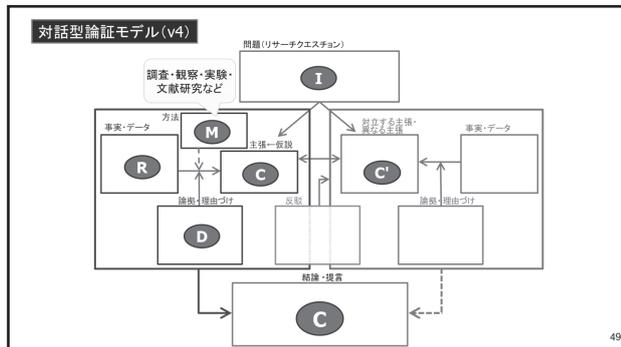
大学での研究とのつながり

- 研究 ≡ 探究 ≠ 調べ学習
- 研究と探究
 - 共通点: 構造は同じ (IMRAD)
 - Introduction: どんな問題?
 - Methods: どんな方法で?
 - Results: どんな結果になった?
 - Discussion: 何を意味する?
 - Conclusion: 結論は?
 - 相違点: 研究には新規性と学術的価値が必要

① 自ら問題を発見し、
② 調査・観察・実験などによって事実を明らかにし、
③ 事実に基づいて論理的・批判的な思考・判断を行い、
④ 導いた結論を表現したり、問題を解決したりする学習活動

□ 梶見孝 (2017) 『探究力と創造性の獲得』高澤伸介 (編著)『探究！教育心理学的の世界』新曜社。

スライド 49



スライド 50

ご清聴ありがとうございました



松下 佳代
matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

50